

## 遺族のコメント（詳しい経過）

甲南大公認部活動で上級生が行った名誉棄損（被害学生が売上金を横領した等といった虚偽情報拡散、被害学生に対する根拠のない強制退部）を、甲南大学は、当該部への処分を行うどころか、2018年4月、大学公式文化会において、秋宗秀俊教授部長指導の責任下で、無実の被害学生を部のお金を横領した人物として強制退部としたことを通知した。秋宗部長は、「君やったよね」と被害学生に発言（同年5/24、当時父母の会会長同席）し、伝票を確認するといった調査もないまま、事実無根の誤情報が拡散され続けた。甚大な名誉毀損被害に対して、甲南大学から被害学生への適切な救済処置は行われず、学生の被害が拡大し収拾がつかなくなった同年9月、甲南大学は、ハラスメントが無かったと断定し事件を隠蔽した。

大学側の対応に納得出来ない被害学生は、いわれなき名誉毀損を払拭するため「ハラスメントを実行した部長の交代、ハラスメントを行った部活動の一時停止」を主張し「自分はダメージを負っている。納得出来ない」と訴え続けた。大学側は当該学生を被害者として扱うことなく、秋宗秀俊氏は「当時から部活の停止はないことを伝えている」と取り合わず、中井伊都子副学長は「今もなお問題になっているとは判断していない」と、被害救済とは真逆の高圧的態度の対応で、益々疲弊した被害学生に「そもそも名誉毀損被害は無かった」と告げた。

事件直後より、被害学生自ら当時の学生部に被害を届けた後、被害学生と母親は7ヶ月にも渡って、中村英雄学生部長、秋宗秀俊教授部長、中井伊都子副学長、父母の会会長、長坂悦敬学長、吉沢英成理事長らに悲痛な覚悟で救済を求めている。

その7か月間の被害学生の苦悩は「全力でやってもやっても、大きな敵が、ちょっと悩みすぎて、俺は今から次期学長と面談や、くそ疲れたわ、結論として、今回学生部は処罰はできないと、今まで手放しでやってきたのを管理下におくので、我慢してくれって、自分のお子さんがやられたらおこるやろ？もう甲南にいても辛いだけや、勉強に関係なくいい学校じゃない」というような言葉で、親友らに送信されたLINEに残されている。

また次のような抗議文も残している。「このまま何の処置もなしに活動を続行させてしまふと、後々の彼らのためにならないです。今回のことを何も罰せずに、そのままにすると、又、同じことが起こってしまうと考えているので、処分をお願いします(2018年7月)。強制退部の措置について、全体としてハラスメントが行われたと思う(同8月)。強制退部はハラスメントではないのか、納得がいかない、いったい大学のどこに言えばいい

のか、自分はダメージを負っている。(同年 9 月)もう甲南にいても何もならない、無駄な学費を払う気にもなれない(同 10 月)」

ハラスメント委員会と文化会による強制終了措置の翌日（2018 年 10 月）、被害学生は、最終的抗議の手段として、自身の尊厳を守るため遺書を残して自死に至った。

当時の部上級生、文化会常任委員会、幹部学生たちによる高圧的ハラスメントも、被害学生を苦しめたが、甲南大学当局からは、それらについての加害学生への適切な指導は一切無かった。それどころか大学は、翌年 3 月、学生の死を隠蔽したまま、当該公認部諸活動への学長顕彰授与表彰や公認部祝賀会のイベントを開催し、ネット上でその様子まで発信した。

2018 年当時ハラスメントを行った学生らには、2024 年神戸地裁、2025 年大阪高裁において、賠償命令が出ている。この間、新聞報道や国会で本事件の度重なる発信があっても、文科大臣から真摯に対応するように複数回要請があっても、教育機関である甲南大学が、「公認部活動で死者を出したこと、大学の対応が不適切であったこと」への反省は一切皆無で、兵庫県など公的機関への学生の死亡報告も行わず、ましてや事件再発防止のための措置も全くしていない。遺族告発によるメディアの取材や、学生への大学 HP には「大学の対応に問題はなかった。ご冥福を祈ります。」とのみ発信しており、大学の不適切対応によって起こった学生の死はほぼ無視され続けている。

生前の被害学生に、甲南大学のトップとして「ハラスメントは認めない、現在に至ってなお問題視すべき事情まではないといえる」との言葉を繰り返して、泣き寝入りを強いた人物である中井伊都子当時ハラスメント委員長は、弔問等一切皆無のまま偽情報を発信しつつ、学生死亡後の 2020 年学長に就任し、2024 年には再任までしている。生前の被害から死亡後の一連の大学の対応は、著しく被害学生の尊厳を傷つける精神的加害行動である。学生自死の当日より、大学から職員には緘口令が出ており、現在に至っても遺族への対応は一切皆無のまま、大学からは一人の弔問もなく、7 年以上も放置されてきた。

中井伊都子学長は、この 7 年間『人物教育の甲南』、『甲南らしさ』、『人権を守る』云々と大学広告で発信しているが、（被害）学生の命を慈しむという基本教育理念から著しく逸脱している。また、この大学による本件「指導死」の実態とは裏腹に、大阪・関西万博テーマウイーク（2025 年 8 月 1 日）では、中井伊都子学長による【踏みにじられた平和と人権を前に、今私たちにできることを考えよう】の題目で「一人の命も取り残さない、人間の尊厳を考える」云々？の公演が行われた。自分の拙かった点を反省しない「何があっても謝らない人」が学長として、自己正当化に執着しているその映像は観るに堪えない、違和感極まりないものである。

被害学生遺族、代理人、及び支援チームは被害学生の命がけの抗議の意志を  
引き継ぎ、甲南大学に道義的説明責任を果たすこと及び遺族へ謝罪することを  
強く求めます。